

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特殊研究 a	田中 光
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> イザヤ書の正典的（カノンの）解釈</p>	
<p><到達目標> B. S. チャイルズの解釈的アプローチを理解した上で、イザヤ書の中の「王の預言」と「僕預言」を「正典的」に解釈することを目指す。</p>	
<p><授業の概要> イザヤ書の「王の預言」と「僕預言」のヘブライ語テキストを読み、それに関する注解や論文を読む。</p>	
<p><履修条件> ヘブライ語と英語（できればドイツ語）を理解できることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション&イントロダクション 問題の所在: イザヤ書におけるメシア思想の歴史的発展? 2. B. S. チャイルズのカノンの解釈①: チャイルズのカノン概念の把握 3. B. S. チャイルズのカノンの解釈②: カノンの解釈と他の解釈法の関係・カノンの解釈の批判と受容 イザヤ書を解釈するための解釈的枠組み（regula fidei）に関する考察 4. メシア預言の弁証法: 地上的待望と終末論的待望 イザヤ書 7章 1-17節①（マソラテキストの翻訳前半） 5. イザヤ書 7章 1-17節②（マソラテキストの翻訳後半） 6. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 7. イザヤ書 8章 23節-9章 6節①（マソラテキストの翻訳前半） 8. イザヤ書 8章 23節-9章 6節②（マソラテキストの翻訳後半） 9. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 10. イザヤ書 11章 1-10節①（マソラテキストの翻訳前半） 11. イザヤ書 11章 1-10節②（マソラテキストの翻訳後半） 12. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 13. イザヤ書 32章 1-8節（マソラテキストの翻訳） 14. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 15. 補論的考察: イザヤ書 4章 2-6節 	
<p><準備学習等の指示> ヘブライ語テキストの翻訳、指示された注解・論文の読解を事前に行っておくこと。</p>	
<p><テキスト> BHS; B. S. Childs, <i>Isaiah</i> (Louisville: Westminster John Knox Press, 2001).</p>	
<p><参考書> B. S. Childs, <i>Introduction to the Old Testament as Scripture</i> (Philadelphia: Fortress Press, 1979); D. R. Driver, <i>Brevard Childs Biblical Theologian: For the Church's One Bible</i> (Grand Rapids: Michigan, 2010).</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 前期・後期それぞれ、少なくとも2回の発表をし、期末のレポートに関しては、修士の学生の1.5-2倍の分量のレポートを提出していただく。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特殊研究 b	田中 光
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> イザヤ書の正典的（カノンの）解釈</p>	
<p><到達目標> B. S. チャイルズの解釈的アプローチを理解した上で、イザヤ書の中の「王の預言」と「僕預言」を「正典的」に解釈することを目指す。</p>	
<p><授業の概要> イザヤ書の「王の預言」と「僕預言」のヘブライ語テキストを読み、それに関する注解や論文を読む。</p>	
<p><履修条件> ヘブライ語と英語（できればドイツ語）を理解できることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション&イントロダクション + 四つの王の預言のカノンの意味に関する考察 2. イザヤ書 40-66 章における時間的枠組み: 古いことと新しいこと イザヤ書 42 章 1-9 節（マソラテキストの翻訳） 3. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 4. イザヤ書 48 章 16 節・49 章 6 節①（マソラテキストの翻訳前半） 5. イザヤ書 48 章 16 節・49 章 6 節②（マソラテキストの翻訳後半） 6. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 7. イザヤ書 50 章 4-11 節①（マソラテキストの翻訳前半） 8. イザヤ書 50 章 4-11 節②（マソラテキストの翻訳後半） 9. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 10. イザヤ書 52 章 13 節・53 章 12 節①（マソラテキストの翻訳前半） 11. イザヤ書 52 章 13 節・53 章 12 節②（マソラテキストの翻訳後半） 12. 上記箇所に関連する注解・論文の読解 13. イザヤ書におけるダビデ的要素とモーセ的要素の相互連関についての考察（主に、7 章、52-53 章） 14. ダビデ的要素とモーセ的要素の相互連関の性質についての考察（神学的文法の練磨、礼拝の文脈） 15. 議論の総合・結論的考察 	
<p><準備学習等の指示> ヘブライ語テキストの翻訳、指示された注解・論文の読解を事前に行っておくこと。</p>	
<p><テキスト> BHS; B. S. Childs, <i>Isaiah</i> (Louisville: Westminster John Knox Press, 2001).</p>	
<p><参考書> B. S. Childs, <i>Introduction to the Old Testament as Scripture</i> (Philadelphia: Fortress Press, 1979); D. R. Driver, <i>Brevard Childs Biblical Theologian: For the Church's One Bible</i> (Grand Rapids: Michigan, 2010).</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 前期・後期それぞれ、少なくとも 2 回の発表をし、期末のレポートに関しては、修士の学生の 1.5-2 倍の分量のレポートを提出していただく。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書文学特殊研究 a	小友 聡
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 最新の文献を用いてコヘレト書全体の積義をし、メッセージを読み解く。</p>	
<p><到達目標> 最新の外国語文献からコヘレト書解釈の知見を得、コヘレト書をどう解釈するかを考える。</p>	
<p><授業の概要> 最新の外国語文献を参照しながら、コヘレト書の各章を積義する。</p>	
<p><履修条件> ヘブライ語文法を履修し、英語とドイツ語の文献を読むことができる人が望ましい。</p>	
<p><授業計画> 第1回：オリエンテーション 第2回：総論 第3回：第1章 第4回：第2章 第5回：第3章 第6回：第4章 第7回：第5章 第8回：第6章 第9回：第7章 第10回：第8章 第11回：第9章 第12回：第10章 第13回：第11章 第14回：第12章 第15回：まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> コヘレト書の原文と最近の外国語文献を読む。</p>	
<p><テキスト> BHSあるいはBHQ</p>	
<p><参考書> M.Köhlmoos, Kohelet (ATD), 2015.; A.Schellenberg, Kohelet (Zürcher Bibelkommentare), 2013.; L.Schwiehorst-Schönberger, Kohelet (HThAT), 2004.; A.Schoors, Ecclesiastes (Historical Commentary on the Old Testament), 2013.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業への貢献度とレポート（8000字）によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書文学特殊研究 b	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 契約のテキストを手がかりに、聖書神学的にテキストを読むことの意味を考える。	
<到達目標> 聖書神学の神学的前提と手法を身に付ける。	
<授業の概要> 契約のテキストの特徴を講義する。	
<履修条件> 大学院前期課程との合同の授業であるが、後期の学生には、それに相応しい発表とレポートを求める。	
<p><授業計画></p> <p>01. 契約とは何か</p> <p>02. 契約は新しい思想か</p> <p>03. 契約を「切る」とは、どういうことか</p> <p>04. 契約を「立てる」</p> <p>05. アブラハムの契約</p> <p>06. モーセの契約</p> <p>07. ダビデの契約</p> <p>08. アブラハムの契約の二系統</p> <p>09. 申命記の契約と祭司の契約</p> <p>10. 申命記の契約</p> <p>11. 祭司の契約</p> <p>12. 「ヤーウィスト」の契約</p> <p>13. 契約の破綻 法における</p> <p>14. 契約の破綻 預言者における</p> <p>15. まとめ</p>	
<準備学習等の指示> 話を聞く準備をして来ること。	
<テキスト> その都度指示する。	
<参考書>	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業の中で後期学生に相応しい発表を行い、また授業の最終日に「聖書における契約」と題する小レポートを提出していただく、その発表とレポートの内容によって、評価する。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典特殊研究 a	本間 敏雄
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ></p> <p>旧約聖書原典である写本とマソラ本文、特にマソラの専門的知識を修得し、墮罪物語においてユダヤ教正典(Miqra)としての本文と諸現象の理解を深め、テキストの神学を探る。</p>	
<p><到達目標></p> <p>レニングラード写本(L)を読み、写本本文の特質を把握できる。マソラの専門用語を理解し、その積義的意味を洞察できる。マソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、背後にあるユダヤ教神学について考察する。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>創世記3,4章の墮罪物語を代表的ベン・アシェル写本であるレニングラード写本(L)で読み、ヒブル語本文の諸現象と、ユダヤ教聖書学の結晶であるマソラ読解方法、その積義的意義を学び、テキスト理解を深める。後期課程「旧約聖書原典釈義I a」と合同。</p>	
<p><履修条件></p> <p>ヒブル語文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 創世記3:1-3 蛇の誘惑(1)</p> <p>第2回 3:4-6 a // (2)</p> <p>第3回 3:6 b-10 墮罪</p> <p>第4回 3:11-13 弁明</p> <p>第5回 3:14-15 蛇への宣告</p> <p>第6回 3:16-17 宣告(1)</p> <p>第7回 3:18-19 // (2)</p> <p>第8回 3:20-24 樂園追放</p> <p>第9回 4:1-4 カインとアベル</p> <p>第10回 4:5-8 カインの怒り</p> <p>第11回 4:9-12 罪と罰</p> <p>第12回 4:13-16 カインのしるし</p> <p>第13回 4:17-22 レメクの子ら</p> <p>第14回 4:23-24 レメクの復讐</p> <p>第15回 4:25-26 セト 墮罪物語総括</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p> <p>レニングラード写本(Codex Leningradensis) 写真版。Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、辞書: Holladay、専門的なものは Gesenius、BDB 或いは HALOT (HALAT)。「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間) 12. 補説: 本文の諸現象(補注一覧)。</p>	
<p><参考書></p> <p>「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷/本間共訳)、Leitfaden zur Biblia Hebraica(R.Wonneberger), A simplified guide to BHS(H.P.Rueger), Massorah Gedolah - iuxta Codicem Leningradensem(ed. G.E.Weil). 諸文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>討議及び、写本とマソラ本文の課題に関するレポートによって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典特殊研究 b	本間 敏雄
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 旧約聖書原典である写本とマソラ本文、特にマソラの専門的知識を修得し、ノア物語においてユダヤ教正典 (Miqra) としての本文と諸現象の理解を深め、テキストの神学を深める。</p>	
<p><到達目標> レニングラード写本 (L) を読み、写本本文の特質を把握できる。マソラの専門用語を理解し、その積義的意味を洞察できる。マソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、背後にあるユダヤ教神学について考察する。</p>	
<p><授業の概要> 創世記5章アダムの系図主要箇所及び6、7章のノア物語を代表的ベン・アシェル写本であるレニングラード写本 (L) で読み、ヒブル語本文の諸現象と、ユダヤ教聖書学の結晶であるマソラ読解方法、その積義的意義を学び、テキスト理解を深める。後期課程「旧約聖書原典積義 I b」と合同。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語文法修得者</p>	
<p><授業計画> 第1回 創世記5：1－8 アダム、セト 第2回 5：21－32 エノク～ノア 第3回 6：1－4 神の子たち 第4回 6：5－7 主の後悔 第5回 6：8－10 ノア 第6回 6：11－13 滅びの宣告 第7回 6：14－16 箱舟 第8回 6：17－22 入船指示 (1) 第9回 7：1－5 〃 (2) 第10回 7：6－9 入船 (1) 第11回 7：10－12 洪水 第12回 7：13－16 入船 (2) 第13回 7：17－20 洪水 第14回 7：21－24 滅亡 第15回 ノア物語総括</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> レニングラード写本 (Codex Leningradensis) 写真版。Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、辞書：Holladay、専門的なものは Gesenius、BDB 或いは HALOT (HALAT)。「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近／本間) 12. 補説：本文の諸現象 (補注一覧)。</p>	
<p><参考書> 「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳)、Leitfaden zur Biblia Hebraica(R.Wonneberger), A simplified guide to BHS(H.P.Rueger), Massorah Gedolah - iuxta Codicem Leningradensem(ed. G.E.Weil). 諸文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価 (方法・基準) > 討議及び、写本とマソラ本文の課題に関するレポートによって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉
前期・2単位	<登録条件> 通年での履修が望ましい。
<授業のテーマ> 旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。	
<到達目標> ①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。	
<授業の概要> 聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8-24・5：1-17など）、アラム語文法を学ぶ。	
<履修条件> ヒブル語履修済みであることが望ましい。	
<授業計画> 第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。 第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。 第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞の Peal 形の完了・未完了を学ぶ。 第4回：エズラ4：8-24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。 第5回：エズラ4：8-24の講読(2) 動詞の Hapel 形の完了を学ぶ。 第6回：エズラ4：8-24の講読(3) 動詞の Peal 形の分詞、Hitpeel 形の完了・未完了を学ぶ。 第7回：エズラ4：8-24の講読(4) 動詞の Pael 形の完了・未完了、Hapel 形の未完了を学ぶ。 第8回：エズラ4：8-24の講読(5) 動詞の Hapel 形の分詞を学ぶ。 第9回：エズラ4：8-24の講読(6) 動詞の Pael 形・Hitpeel 形・Hitpaal 形の分詞を学ぶ。 第10回：エズラ4：8-24の講読(7) 二根字動詞の Peal 形と動詞の不定詞・命令を学ぶ。 第11回：エズラ5：1-17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。 第12回：エズラ5：1-17の講読(2) 二根字動詞の Hapel 形を学ぶ。 第13回：エズラ5：1-17の講読(3) 二根字動詞の Hitpeel 形を学ぶ。 第14回：エズラ5：1-17の講読(4) Pè Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第15回：エズラ5：1-17の講読(5) Pè Nûn 動詞の変化を学ぶ。	
<準備学習等の指示> 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition	
<参考書> 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉
後期・2単位	<登録条件> 通年での履修が望ましい。
<授業のテーマ> 旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。	
<到達目標> ①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。	
<授業の概要> 聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）	
<履修条件> ヒブル語履修済みであることが望ましい。	
<授業計画> 第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。 第2回：ダニエル書の講読(1) Pè' ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。 第3回：ダニエル書の講読(2) Pè' ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。 第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で字位転換が起こる場合について学ぶ。 第5回：ダニエル書の講読(4) Lamed' ālep・Lamed Hê 動詞の変化を学ぶ。 第6回：ダニエル書の講読(5) 二重' ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。 第7回：ダニエル書の講読(6) 二重' ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。 第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾つきの動詞の変化を学ぶ。 第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。 第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。 第11回：エレミヤ書の緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。 第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。 第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。 第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。	
<準備学習等の指示> 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition	
<参考書> 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、タルグムのアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書神学特殊研究 a	焼山 満里子
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> テサロニケの信徒への手紙一、二積義を通して初期キリスト教の形成、パウロ伝道について学ぶ。</p>	
<p><到達目標> パウロの真正書簡、第二書簡の違いをふまえてテサロニケ両書簡、パウロの伝道活動を理解する。</p>	
<p><授業の概要> テサロニケの信徒への手紙一、二の積義。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テサロニケの信徒への手紙一、概説 2. テサロニケの信徒への手紙一、1章 3. テサロニケの信徒への手紙一、2章 4. テサロニケの信徒への手紙一、3章 5. テサロニケの信徒への手紙一、4章 6. テサロニケの信徒への手紙一、5章 7. テサロニケの信徒への手紙一、総括 8. テサロニケの信徒への手紙二、概説 9. テサロニケの信徒への手紙二、1章 10. テサロニケの信徒への手紙二、2章 11. テサロニケの信徒への手紙二、3章 12. テサロニケの信徒への手紙二、総括 13. テサロニケの信徒への手紙一、二 終末論 14. テサロニケの信徒への手紙一、二 レトリック 15. 総括 	
<p><準備学習等の指示> 担当する箇所を G.フィー『新約聖書の積義』に従って積義し、発表、検討し合う。</p>	
<p><テキスト> 適宜紹介する。</p>	
<p><参考書> 適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、議論への貢献等による授業参加、期末課題。博士後期の学生は積義レポートを提出する。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書神学特殊研究 b	焼山 満里子
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 使徒パウロの伝道活動とパウロ教会について学ぶ。</p>	
<p><到達目標> パウロ書簡をその歴史的、社会的状況をふまえて理解する。</p>	
<p><授業の概要> 新約聖書を社会学的方法によって理解する。『古代都市のキリスト教』を中心に近似のテーマを扱う他に三冊のテキストを比較検討する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ミークス『古代都市のキリスト教』序論/ 3. クナップ『古代ローマの庶民たち』1、2章 4. ミークス 1章 「パウロ的キリスト教の都市環境」 5. スターク『キリスト教とローマ帝国』1、2、3章 6. ミークス 2章 「パウロ教会の会員達の社会層」 7. クナップ 3、4、5章 8. ミークス 3章 「教会の形成」 9. スターク 4、5、 10. スターク 6、7章 11. ミークス 4章 「統治」 12. スターク 8、9、10章 13. ミークス 5章 「祭儀」 14. ミークス 6章 「信仰形態と生活形態」 15. ウィルケン 『ローマ人が見たキリスト教』I、II、III章 	
<p><準備学習等の指示> 各自、テキストを分担し講読を行う。各回発表担当者は議論の紹介をし、受講者と共に批判検討を行う。</p>	
<p><テキスト> ミークス『古代都市のキリスト教』ヨルダン社 1989年 クナップ『古代ローマの庶民たち』白水社 2015年 スターク『キリスト教とローマ帝国』新教出版社、2014年 ウィルケン『ローマ人が見たキリスト教』ヨルダン社、1987年</p>	
<p><参考書> 適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、議論への貢献等による授業参加、期末課題。博士後期の学生はテキスト4冊それぞれの書評を提出する。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信
前期・2単位	<登録条件> 原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<授業のテーマ> ヨハネの福音書10～11章の原典釈義。	
<到達目標> 研究史、釈義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に釈義し、神学的考察へと向かえるようにする。	
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。	
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力(ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい)を有すること。	
<授業計画> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。</p> <p>第03回 テキストの文学批評の実際。</p> <p>第04回 テキストと歴史批評の実際。</p> <p>II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 ヨハネ10:01～06(羊の囲いのたとえ)の原典釈義</p> <p>第06回 ヨハネ10:07～13(羊飼いのたとえ-その1)の原典釈義</p> <p>第07回 ヨハネ10:14～21(羊飼いのたとえ-その2)の原典釈義</p> <p>第08回 ヨハネ10:22～30(ユダヤ人らの応答-その1)の原典釈義</p> <p>第09回 ヨハネ10:31～41(ユダヤ人らの応答-その2)の原典釈義</p> <p>第10回 ヨハネ11:01～10(ラザロの死-その1)の原典釈義</p> <p>第11回 ヨハネ11:11～16(ラザロの死-その2)の原典釈義</p> <p>第12回 ヨハネ11:17～27(復活のいのち)の原典釈義</p> <p>第13回 ヨハネ11:28～37(イエスの涙)の原典釈義</p> <p>第14回 ヨハネ11:38～44(ラザロの蘇生)の原典釈義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。</p>	
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所ギリシャ語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。	
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>	
<参考書> <p>R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年</p> <p>R・A・カルベッパ著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年</p> <p>R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年</p> <p>C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i>, 2003.</p> <p>M. Endo, <i>Creation and Christology - A Study on the Johannine Prologue</i> (WUNT), 2002. 他、クラスで随時紹介。</p>	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000文字])。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> ヨハネの黙示録 16～18章の原典積義。</p>	
<p><到達目標> 研究史、積義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に積義し、神学的考察へと向かえるようにする。</p>	
<p><授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p>	
<p><履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力（ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい）を有すること。</p>	
<p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 インTRODakション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1～16章7節までを概観し、積義の営みにおける課題と観点を確認する。</p> <p>II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に</p> <p>第05回 黙示録16：08～11（第四、第五の天使の鉢）の原典積義 第06回 黙示録16：12～16（第六の天使の鉢）の原典積義 第07回 黙示録16：17～21（第七の天使の鉢）の原典積義 第08回 黙示録17：01～06a（大淫婦）の原典積義 第09回 黙示録17：07b～14（大淫婦の秘められた意味）の原典積義 第10回 黙示録17：15～18（さばきの予告）の原典積義 第11回 黙示録18：01～03（バビロン滅亡）の原典積義 第12回 黙示録18：11～17a（地の商人たち）の原典積義 第13回 黙示録18：17b～20（海を行く者たち）の原典積義 第14回 黙示録18：21～24（宣告）の原典積義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 積義演習の総括的な反省と展望。</p>	
<p><準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所ギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。</p>	
<p><テキスト> Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p>	
<p><参考書> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・中巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i>, 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000～10,000文字]）。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
聖書解釈学特殊研究 a	中野 実
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ> ヘブライ書の釈義的研究	
<到達目標> このクラスを通して、聖書テキストを原典で釈義する技術を身につけることができる。	
<授業の概要> 今年度は、ヘブライ書の「釈義」という課題を一緒に学ぶ。序論的な事柄を学んだのち、各単元（ペリコペー）を分担しつつ、釈義していく。	
<履修条件> 通年で履修する事が好ましい。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> ① オリエンテーション ② 緒論Ⅰ いつ、どこで、誰によって執筆されたか？ ③ 緒論Ⅱ 誰に対して何のために書かれたか？ ローマ教会の背景？ ④ 緒論Ⅲ ヘブライ書の構成について ⑤ 1章1-4節 「文脈、構成、背景」 ⑥ 1章1-4節 「文法上の問題」「キーワード、キー概念」 ⑦ 1章5-14節 学生による発題 ⑧ 1章5-14節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」 ⑨ 1章5-14節 「キーワード、キー概念」「総合およびメッセージ」 ⑩ 2章1-4節 学生による発題、「文脈、構成、背景」 ⑪ 2章1-4節 「文法上の問題」「キーワード、キー概念」 ⑫ 2章5-18節 学生による発題 ⑬ 2章5-18節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」 ⑭ 2章5-18節 「キーワード、キー概念」「総合およびメッセージ」 ⑮ まとめ 	
<準備学習等の指示>とにかくこつこつと聖書テキストと格闘すること。	
<テキスト>ギリシャ語新約聖書	
<参考書>必要に応じてクラスで指示する	
<学生に対する評価（方法・基準）>参加、分担発表（40%）および（8000-10000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
聖書解釈学特殊研究 b	中野 実
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ>ヘブライ書の釈義的研究	
<到達目標>このクラスを通して、聖書テキストを原典で釈義する技術を身に着けることができる。	
<授業の概要>ヘブライ書の釈義という課題を、分担しながらともに学ぶ。	
<履修条件>通年で履修することが好ましい。	
<p><授業計画></p> <p>① 3章1-6節 学生による発題</p> <p>② 3章1-6節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」</p> <p>③ 3章1-6節 「キーワード、キー概念」「総合およびメッセージ」</p> <p>④ 3章7-19節 学生による発題</p> <p>⑤ 3章7-19節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」</p> <p>⑥ 3章7-19節 「キーワード、キー概念」「総合およびメッセージ」</p> <p>⑦ 4章1-11節 学生による発題</p> <p>⑧ 4章1-11節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」</p> <p>⑨ 4章1-11節 「キーワード、キー概念」「総合およびメッセージ」</p> <p>⑩ 4章12-13節 「文脈、構成、背景」「文法上の問題」「キーワード、キー概念」</p> <p>⑪ 4章14-16節 学生による発題、「文脈、構成、背景」</p> <p>⑫ 4章14-16節 「文法上の問題」「キーワード、キー概念」</p> <p>⑬ 5章1-10節 学生による発題、「文脈、構成、背景」</p> <p>⑭ 5章1-10節 「文法上の問題」「キーワード、キー概念」</p> <p>まとめ</p>	
<準備学習等の指示>こつこつ聖書テキストと格闘すること	
<テキスト>ギリシャ語新約聖書	
<参考書>必要に応じてクラスで指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）>参加度、分担発表（40%）および（8000-10000字の）期末レポートによって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達していない場合、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件>2011年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者は、博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。</p>	
<p><到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件>2011年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者は、博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。</p>	
<p><到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 a	近藤 勝彦
前期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 「三位一体の神」	
<到達目標> キリスト教信仰の中心であり、決定的な内容である「三位一体の神」とは何か、その認識と内容をめぐって理解を深める。特に現代の神学が何を問題にしているかを理解し、神学（教義学）的に考えることを学ぶ。	
<授業の概要> 三位一体の神の認識が歴史的啓示に基づいてどのように認識され、その内容として「三位と一体」「内在的三位一体と経綸的三位一体」「フィリオクエの問題」「聖霊の位格性」など、重大問題を扱う。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 歴史的啓示からの神認識 (2) 歴史的啓示による神の認識 (3) 三つの位格と神の一体性 (4) 経綸的三位一体と内在的三位一体、その区別 (5) その関係 (6) 三位にいます神の一体性 (7) 一体性をめぐる三つの説（唯一神教的 vs 三神論的） (8) 三位一体的唯一神教 (9) 神性の起源なき起源としての父なる神のモナルキア (10) フィリオクエ（子とからも） (11) 聖霊の位格性 (12) キリストと聖霊 (13) 三位一体と神の受苦 (14) 三位一体の神の人格性 (15) 総括 	
<p><準備学習等の指示></p> <p>古代教会における三位一体論をめぐる教理史について復習をしておくこと</p>	
<p><テキスト></p> <p>主要な資料としては、その都度「講義資料」を配布する。</p>	
<p><参考書> 近藤『啓示と三位一体』（教文館）、モルトマン『三位一体と神の国』（新教出版社）、パネンベルク『組織神学入門』（教団出版局）、バルト『神の言葉 1/2』（新教出版社）</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 6000－8000 字のレポートによって総合的に評価する。取り扱う相手の文献を明示し、対論を試み、講義で扱った内容との対論も合わせて行うこと。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 b	近藤 勝彦
後期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 「創造論」	
<到達目標> キリスト教教義学が扱う「創造論」のほぼ全容を学び、創造の神、神の創造の働き、被造物としての人間と世界、さらに時間や空間についての神学的理解を身に着ける。	
<授業の概要> 創造者である神とその創造行為から、被造物としての世界万物や人間の理解に及ぶ。その都度、この信仰の理解が持っている現代的な意味について検討したい。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 歴史的啓示と創造信仰 (2) 創造者である神としての三位一体の神 (3) 神の創造行為（無からの創造と混沌の秩序化） (4) 被造物の保持と継続的創造 (5) 新しい創造と進化 (6) 創造の時間と空間 (7) 創造された世界 (8) 一つの世界（はじめから終わりまで） (9) 天と地 (10) 被造物としての人間 (11) 共に生きる人間 (12) 他の生命体 (13) 宇宙の問題 (14) 死と悪の問題（創造の目標、創造と神の国、創造と救済） (15) 総括 	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> その都度、講義資料として拙著のノートを配布する。	
<参考書> 拙著『啓示と三位一体』（教文館）、モルトマン『創造における神』（新教出版社）、パネンベルク『組織神学入門』（教団出版局）、『ブルンナー著作集 第3巻』（教文館）	
<学生に対する評価（方法・基準）> 6000－8000字のレポートによって総合的に評価する。取り扱う相手と文献を明示し、対論を試み、同時に講義で扱った内容との対論も試みること。	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代神学特殊研究 a	芳賀 力
前期・2単位	<登録条件> 通年(a,b)の登録が望ましい。
<p><授業のテーマ> 日本の神学に大きな影響を与えたスコットランドの神学者ジェームズ・デニーの古典的なテキストを読み解く。前期は『イエスと福音』をテキストに、新約聖書のキリスト論を教義学的に考察する。</p>	
<p><到達目標> 歴史批評学の知見を念頭に置きながらも、福音を説教する者として揺るがない確信を得ること。</p>	
<p><授業の概要> 担当者を決め、順番に内容を要約し、コメントしてもらい、神学的に討論する。</p>	
<p><履修条件> 大学院博士課程後期課程または継続教育に在籍の者。</p>	
<p><授業計画> 第1回 ジェームズ・デニーの神学の特徴について導入的な考察をし、分担を決める。</p> <p>第2回 『イエスと福音』 15－50頁の内容を検討する。</p> <p>第3回 『イエスと福音』 51－82頁の内容を検討する。</p> <p>第4回 『イエスと福音』 83－115頁の内容を検討する。</p> <p>第5回 『イエスと福音』 116－148頁の内容を検討する。</p> <p>第6回 『イエスと福音』 148－186頁の内容を検討する。</p> <p>第7回 『イエスと福音』 186－218頁の内容を検討する。</p> <p>第8回 『イエスと福音』 218－253頁の内容を検討する。</p> <p>第9回 『イエスと福音』 253－290頁の内容を検討する。</p> <p>第10回 『イエスと福音』 291－332頁の内容を検討する。</p> <p>第11回 『イエスと福音』 332－375頁の内容を検討する。</p> <p>第12回 『イエスと福音』 375－417頁の内容を検討する。</p> <p>第13回 『イエスと福音』 417－455頁の内容を検討する。</p> <p>第14回 『イエスと福音』 455－485頁の内容を検討する。</p> <p>第15回 これまでの議論を振り返り、総括する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前もってテキストの該当箇所をよく読んでくること。</p>	
<p><テキスト> J.デニー『イエスと福音』（J.デニー著作集第1巻、一麦出版社、2007年）を各自購入すること。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 学期末に自分の研究と関連させる仕方で、小論文を提出してもらう。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係																															
現代神学特殊研究 b	芳賀 力																														
後期・2単位	<登録条件> 通年(a,b)の登録が望ましい。																														
<p><授業のテーマ> 前期に引き続き、ジェームズ・デニーの古典的なテキストを読み解く。後期は名著と謳われる『キリストの死』をテキストに、新約聖書の贖罪論を教義学的に考察する。</p>																															
<p><到達目標> 歴史批評学の知見を念頭に置きながらも、福音を説教する者として揺るがない確信を得ること。</p>																															
<p><授業の概要> 担当者を決め、順番に内容を要約し、コメントしてもらい、神学的に討論する。</p>																															
<p><履修条件> 大学院博士課程後期課程または継続教育に在籍の者</p>																															
<p><授業計画></p> <table border="0"> <tr> <td>第1回 『キリストの死』</td> <td>31-59頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第2回 『キリストの死』</td> <td>60-84頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第3回 『キリストの死』</td> <td>85-113頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第4回 『キリストの死』</td> <td>114-141頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第5回 『キリストの死』</td> <td>141-170頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第6回 『キリストの死』</td> <td>171-201頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第7回 『キリストの死』</td> <td>201-226頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第8回 『キリストの死』</td> <td>226-251頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第9回 『キリストの死』</td> <td>253-278頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第10回 『キリストの死』</td> <td>278-308頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第11回 『キリストの死』</td> <td>308-338頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第12回 『キリストの死』</td> <td>339-370頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第13回 『キリストの死』</td> <td>370-401頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第14回 『キリストの死』</td> <td>403-435頁の内容を検討する。</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>これまでの議論を振り返り、総括する。</td> </tr> </table>		第1回 『キリストの死』	31-59頁の内容を検討する。	第2回 『キリストの死』	60-84頁の内容を検討する。	第3回 『キリストの死』	85-113頁の内容を検討する。	第4回 『キリストの死』	114-141頁の内容を検討する。	第5回 『キリストの死』	141-170頁の内容を検討する。	第6回 『キリストの死』	171-201頁の内容を検討する。	第7回 『キリストの死』	201-226頁の内容を検討する。	第8回 『キリストの死』	226-251頁の内容を検討する。	第9回 『キリストの死』	253-278頁の内容を検討する。	第10回 『キリストの死』	278-308頁の内容を検討する。	第11回 『キリストの死』	308-338頁の内容を検討する。	第12回 『キリストの死』	339-370頁の内容を検討する。	第13回 『キリストの死』	370-401頁の内容を検討する。	第14回 『キリストの死』	403-435頁の内容を検討する。	第15回	これまでの議論を振り返り、総括する。
第1回 『キリストの死』	31-59頁の内容を検討する。																														
第2回 『キリストの死』	60-84頁の内容を検討する。																														
第3回 『キリストの死』	85-113頁の内容を検討する。																														
第4回 『キリストの死』	114-141頁の内容を検討する。																														
第5回 『キリストの死』	141-170頁の内容を検討する。																														
第6回 『キリストの死』	171-201頁の内容を検討する。																														
第7回 『キリストの死』	201-226頁の内容を検討する。																														
第8回 『キリストの死』	226-251頁の内容を検討する。																														
第9回 『キリストの死』	253-278頁の内容を検討する。																														
第10回 『キリストの死』	278-308頁の内容を検討する。																														
第11回 『キリストの死』	308-338頁の内容を検討する。																														
第12回 『キリストの死』	339-370頁の内容を検討する。																														
第13回 『キリストの死』	370-401頁の内容を検討する。																														
第14回 『キリストの死』	403-435頁の内容を検討する。																														
第15回	これまでの議論を振り返り、総括する。																														
<p><準備学習等の指示> 前もってテキストの該当箇所をよく読んでくること。</p>																															
<p><テキスト> J.デニー『キリストの死』(J.デニー著作集第2巻、一麦出版社、2007年)を各自購入すること。</p>																															
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 学期末に自分の研究と関連させる仕方で、小論文を提出してもらう。</p>																															

組織神学専攻・組織神学関係	
現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件> 現代哲学特殊研究 b との通年履修が望ましい。
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』の精読を通して、組織神学的思考を養う。また、20世紀の代表的神学者であるバルトの神学思想の特色について深い理解を得る。	
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して教義学の特定の課題(主題)についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題に関するバルト神学の貢献と問題点を理解する。	
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から創造論中の天使論(51節)を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。	
<履修条件> 特になし。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. テキスト、165～183頁(1. 天使論の限界①) 3. 同、183～206頁(同②) 4. 同、206～228頁(同③) 5. 同、228～244頁(同④) 6. 同、244～260頁(同⑤) 7. 同、261～278頁(2. 天国①) 8. 同、279～305頁(同②) 9. 同、305～325頁(同③) 10. 同、325～348頁(同④) 11. 同、348～374頁(同⑤) 12. 同、375～393頁(3. 神の使者とその敵対者①) 13. 同、393～413頁(同②) 14. 同、413～432頁(同③) 15. 同、432～452頁(同④) 	
<準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席すること。さらには、関連する問題について自分で積極的にリサーチし、考察を深めること。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅲ/2 創造者とその被造物(下)』、吉永正義訳(新教出版社、オンデマンド)、165～452頁。	
<参考書> 授業の中で適宜、紹介する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業への参加度、小課題、および期末のレポート(本文3,200字以上)による。	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件> 現代哲学特殊研究 a との通年履修が望ましい。
<授業のテーマ> 前期と同じ。	
<到達目標> 前期と同じ。	
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から創造論中の天使論(51節)の残り、および同じく倫理学の前半(52節・53節)を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。	
<履修条件> 特になし。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、および、テキスト(天使論)、453～467頁(3. 神の使者とその敵対者⑤) 2. 同、467～480頁(同⑥) 3. テキスト(倫理学)、3～22頁(創造の教説の課題としての倫理学 1. 特殊倫理学の課題①) 4. 同、22～41頁(同②) 5. 同、41～57頁(同③) 6. 同、58～84頁(2. 命令者としての創造者なる神) 7. 同、85～104頁(神の前での自由 1. 祝日①) 8. 同、104～120頁(同②) 9. 同、120～132頁(同③) 10. 同、133～151頁(2. 信仰告白①) 11. 同、152～160頁(同②) 12. 同、161～178頁(3. 祈り①) 13. 同、178～199頁(同②) 14. 同、199～217頁(同③) 15. まとめ 	
<準備学習等の指示> 前期と同じ。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅲ／2 創造者とその被造物〈下〉』、吉永正義訳(新教出版社、オンデマンド)、453～480頁；『教会教義学・創造論Ⅳ／1 創造者なる神の戒め〈i〉』、吉永正義訳(新教出版社、オンデマンド)。	
<参考書> 授業の中で適宜、紹介する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業への参加度、小課題、および期末のレポート(本文3,200字以上)による。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 神学史特殊研究 b も履修が望ましい。
<授業のテーマ> 学生は、中世、宗教改革期から現代までの洗礼と聖餐の教理を第一次資料にあたり学ぶ。	
<到達目標> ①学生はテーマに関する神学概念を習得する。②それを世界史―教会史の文脈で歴史神学的に理解する。③それらの神学概念を現代の教会形成にどう生かすかを主体的・実践的に身に付けてゆく。	
<授業の概要> まず WCC の「リマ文書」を読み、教理的合意を学ぶ。次に中世・宗教改革期から現代までの第一次資料を歴史神学的に読み、現代の神学問題への応用を考える。	
<履修条件> 神学史特殊研究 b もなるべく履修すること。	
<p><授業計画></p> <p>第 1 回：コースの紹介。履修者との導入討議。</p> <p>第 2 回：発表（一） 「リマ文書」の「洗礼」について。（学生 2～3 名）</p> <p>第 3 回：発表（二） 「リマ文書」の「聖餐」について。（学生 2～3 名）</p> <p>第 4 回：資料研究（一） 中世の洗礼と聖餐論 1（第四ラテラノ公会議、その他公式教令文書）</p> <p>第 5 回：資料研究（二） 同上 2（枢機卿カジェタン、S. プリエリアス、C. ヘーン）</p> <p>第 6 回：資料研究（三） 宗教改革の洗礼と聖餐論 1（ルターとルター派の「一致信条書」他）</p> <p>第 7 回：資料研究（四） 同上 2（ツヴィングリ、布林ガーと「第二スイス信仰告白」）</p> <p>第 8 回：資料研究（五） 同上 3（カルヴァンとジュネーヴの諸信仰告白。「ハイデルベルク信仰問答」）</p> <p>第 9 回：資料研究（六） 同上 4（イングランド教会の「三十九箇条」その他）</p> <p>第 10 回：資料研究（七） 同上 5（再洗礼派および関連諸信仰宣言）</p> <p>第 11 回：資料研究（八） 同上 6（トレント公会議およびその後の近・現代カトリックの諸教令など）</p> <p>第 12 回：資料研究（九） ピューリタニズムの洗礼と聖餐論（「ウェストミンスター信仰告白」、「サボイ宣言」、「ロンドン宣言」）</p> <p>第 13 回：資料研究（十） メソディズムの洗礼と聖餐論（J. ウェスレーと「宗教箇条」）</p> <p>第 14 回：資料研究（十一） 日本の諸教派の洗礼と聖餐論 1（改革―長老派系、会衆派系、メソディスト系、バプテスト系、その他）</p> <p>第 15 回：資料研究（十二） 同上 2 日本基督教団の「口語式文」における洗礼と聖餐理解、まとめ</p>	
<準備学習等の指示> 「リマ文書」の、学びは発表形式で行うが、以後は講義形式でテキストを読んで議論するので積極的に参加すること。	
<テキスト> 『洗礼・聖餐・職務』（教団出版局）	
<参考書> A. E. マックグラス『宗教改革の思想』（教文館）	
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 講義に対しては積極的に議論すること。2. 期末には各自の研究レポートを提出すること（分量は 400 字詰め原稿用紙で 30 枚）。3. 上掲の到達目標に掲げた基準にそって評価を与える。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 神学史特殊研究 a も履修が望ましい。
<授業のテーマ> 学生は、中世、宗教改革期から現代までの教会と職務の教理を第一次資料にあたり学ぶ。	
<到達目標> ①学生はテーマに関する神学概念を習得する。②それを世界史―教会史の文脈で歴史神学的に理解する。③それらの神学概念を現代の教会形成にどう生かすかを主体的・実践的に身に付けてゆく。	
<授業の概要> まず WCC の「リマ文書」を読み、教理的合意を学ぶ。次に中世・宗教改革期から現代までの第一次資料を歴史神学的に読み、現代の神学問題への応用を考える。	
<履修条件> 神学史特殊研究 a もなるべく履修すること。	
<p><授業計画></p> <p>第 1 回：コース紹介。履修者との導入討議。</p> <p>第 2 回：発表（一） 「教会」についての現代の教理論文を読む。（学生 2～3 名）</p> <p>第 3 回：発表（二） 「リマ文書」の「職務」について。（学生 3～4 名）</p> <p>第 4 回：資料研究（一） 中世の教会と職務論 1（中世の教会と職務への公式教令文書）</p> <p>第 5 回：資料研究（二） 同上 2（トマス・アクイナス、ヤン・フス、教皇ピウス二世等）</p> <p>第 6 回：資料研究（三） 宗教改革の教会と職務論 1（ルターとルター派の「一致信条書」他）</p> <p>第 7 回：資料研究（四） 同上 2（ツヴィングリ、布林ガーと「第二スイス信仰告白」）</p> <p>第 8 回：資料研究（五） 同上 3（カルヴァンとジュネーヴの諸信仰告白、「ハイデルベルク信仰問答」）</p> <p>第 9 回：資料研究（六） 同上 4（イングランド教会の「三十九箇条」その他）</p> <p>第 10 回：資料研究（七） 同上 5（再洗礼派および関連諸信仰宣言）</p> <p>第 11 回：資料研究（八） 同上 6（トレント公会議およびその後の近・現代のカトリックの諸教令など）</p> <p>第 12 回：資料研究（九）ピューリタニズムの教会と職務論（「ウェストミンスター信仰告白」、「サボイ宣言」、「ロンドン宣言」）</p> <p>第 13 回：資料研究（十）メソディズムの教会と職務論（J.ウェスレーと「宗教箇条」）</p> <p>第 14 回：資料研究（十一）日本の諸教派の教会と職務論 1（改革―長老派系、会衆派系、メソディスト系、バプテスト系、その他）</p> <p>第 15 回：資料研究（十二） 同上 2 日本基督教団の「口語式文」における教会と職務理解、まとめ。</p>	
<準備学習等の指示> 「リマ文書」の、学びは発表形式で行うが、以後は講義形式でテキストを読んで議論するので積極的に参加すること。	
<テキスト> 『洗礼・聖餐・職務』（教団出版局）	
<参考書> A. E. マックグラース『宗教改革の思想』（教文館）	
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 講義に対しては積極的に議論すること。2. 期末には各自の研究レポートを提出すること（分量は 400 字詰め原稿用紙で 30 枚）。3. 上掲の到達目標に掲げた基準にそって評価を与える。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
宗教改革史特殊研究 a	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件> なし
<授業のテーマ> 宗教改革の大きな流れを考慮しつつ、ジュネーヴの改革者カルヴァンの生涯と神学を学ぶ。	
<到達目標> 一次史料を十分理解して、カルヴァンの思惟方法と神学の特徴を理解できるようにする。	
<授業の概要> 宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』I～IIの神論とキリスト論、聖霊論を読んで、カルヴァン神学の特色をつかむ。	
<履修条件> 特になし	
<授業計画> 第1回：宗教改革の時代概観：ルターからツヴィングリまで 第2回：宗教改革運動の諸相一再洗礼派や熱狂主義 第3回：カルヴァンの生涯（1）生誕から『キリスト教綱要』（初版）出版まで 第4回：カルヴァンの生涯（2）第一次ジュネーヴ滞在からストラースブルク時代 第5回：カルヴァンの生涯（3）ジュネーヴでの活動再開と改革運動の深化 第6回：カルヴァンの著作解題 第7回：カルヴァン神学の研究史概観 第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）神論I 神認識 第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）神論II 聖書と神認識 第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）キリスト論I 律法と福音、キリストの三職 第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト論II 贖罪 第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）聖霊論I 信仰義認 第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖霊論II 第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）聖霊論III 第15回：全体に関わる質疑応答とディスカッション	
<準備学習等の指示> 特になし	
<テキスト> カルヴァン『キリスト教綱要』1・2篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）、D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i> , Cambridge University Press, Part I～IIを読むこと。	
<参考書> ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文を総合して評価する。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
宗教改革史特殊研究 b	関川 泰寛
後期・2単位	<登録条件> なし
<p><授業のテーマ> 宗教改革の大きな流れを考慮しつつ、ジュネーヴの改革者カルヴァンの生涯と神学を学ぶ。</p>	
<p><到達目標> 一次史料を十分理解して、カルヴァンの思惟方法と神学の特徴を理解できるようにする。</p>	
<p><授業の概要> 宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅲ～Ⅳの教会論に関わるカルヴァン神学の特色をつかむ。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：カルヴァンと礼拝 第2回：ジュネーヴの教会の実像・カルヴァンにおける教会と国家 第3回：ローマ・カトリック教会との対立 第4回：再洗礼派と熱狂主義者との対立 第5回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）悔い改めについて 第6回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）信仰義認 第7回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）福音と律法 第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト教的な自由 第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）祈りと礼拝 第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖書 第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）選び 第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（8）真の教会と偽りの教会 第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（9）戒規 第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（10）洗礼 第15回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（11）聖餐</p>	
<p><準備学習等の指示> 特になし</p>	
<p><テキスト> カルヴァン『キリスト教綱要』3・4篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i>, Cambridge University Press, Part Ⅲ～Ⅳを読むこと。</p>	
<p><参考書> ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文を総合して評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> アメリカ宗教教育史</p>	
<p><到達目標> 近現代アメリカ市民社会と教会を支えた代表的なキリスト教教育思想の流れを把握する</p>	
<p><授業の概要> 初めに16～17世紀前半のニューイングランド・ピューリタニズムにおける高等教育を取り上げた後、17世紀後半から20世紀前半までのプロテスタント諸教派を背景とする道徳・宗教・教育、及びその代表的な担い手となった指導者たちの思想を追っていく。その際に会衆派とメソジスト派の系譜を辿ってみる。最後に、日本のキリスト教大学の使命と課題を取り上げる。</p>	
<p><履修条件> 履修者は授業時に1～2度発表の機会を得るが、発表しない学生も当該箇所を事前に読んで準備し、討論に加わっていただく。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ニューイングランド・ピューリタニズムにおける高等教育 2. 会衆派教会の経験と慈愛、道徳共同体の構築 3. B.フランクリンの非宗派的な道徳的人間形成ーピューリタニズムと理神論の背景ー 4. アメリカ中西部のキリスト教教育ーコモン・スクーラー 5. 長老派信仰のキリスト教教育観ーマクガフィーの場合ー 6. マサチューセッツの宗教教育・道徳教育ー会衆派とユニテリアニズムー 7. マサチューセッツの宗教教育政策 8. コークスベリー・カレッジの教育 9. メソジスト派カレッジと教育方針 10. プロテスタント大学の高等教育 11. 非宗派的キリスト教大学 12. 日本のキリスト教大学の草創期ーその1ー 13. 日本のキリスト教大学の草創期ーその2ー 14. キリスト教大学の教育論ー環境教育の視点ー 15. キリスト教大学の教育論ー変わりゆく大学の中でー 	
<p><準備学習等の指示> セミナー形式で、発表学生以外の受講者も、指定箇所を予め読んで授業に臨むこと</p>	
<p><テキスト></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京基督教大学共立基督教研究所編、『大学とキリスト教教育』、ヨルダン社、1997年（当該箇所プリント用意） ・大森秀子、『多元的宗教教育の成立過程』、東信堂、2009年（各自購入） 	
<p><参考書></p> <ul style="list-style-type: none"> ・四国学院大学キリスト教教育研究所[編]、『大学とキリスト教教育』、新教出版社、2005年 ・P.G.アルトバック・馬越編、『アジアの高等教育改革』、玉川大学出版部、2006年 ・青山学院大学総合研究所キリスト教文庫研究所[編]、『キリスト教大学の使命と課題』、教文館、2011年 	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 2/3以上の出席を評価の前提とする。発表と討論での発言などの参加度、レポート（5000～6000字、その際参考文献2冊以上列挙、利用のこと）提出などで評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特殊研究 b	朴 憲郁
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 現代キリスト教教育学の使命と課題</p>	
<p><到達目標> キリスト教教育の中心に据えられる教会教育を学として確立した教会教育学を中心にして、現代のキリスト教教育学の動向を把握し、その使命と課題を把握する</p>	
<p><授業の概要> 各種の教会教育論を統合して学的領域として確立した教会教育学(Gemeindepädagogik)が近年注目されている。その中心にある受洗(前・後)教育の理論と動向を見極めつつ、告白的共同体としての教会の果たすべきディダクターの職務における諸次元的広がり(聖書教育, CS 教育, family ministry, 結婚・家庭教育, 成人教育, キリスト教及び一般の学校教育への射程, その他)を考察していく。 授業の途中で、20世紀後半のアメリカで、代表的な教会教育論の書物数冊を読んで、基本的な知識に習熟し、その後、近年注目されてきたナラティブ・ペダゴジーをナラティブ・セオロジーとの関係で把握し、論じていく。</p>	
<p><履修条件> 履修者は授業時に1~2度発表の機会を得るが、発表しない学生も当該箇所を事前に読んで準備し、討論に加わっていただく。</p>	
<p><授業計画> 1. 教会教育学とは何か? その一 (講義) 2. 教会教ナラティブ・ペダゴジーとは その二 育学とは何か? その二 (講義) 3. J.D.スマート、『教会の教育的使命』、把握と議論 その一 4. J.D.スマート、『教会の教育的使命』、把握と議論 その二 5. L.M.ラッセル、『キリスト教教育の革新』、把握と議論 その一 6. L.M.ラッセル、『キリスト教教育の革新』、把握と議論 その二 7. J.H.ウェスターホフ、『子どもの信仰と教会』 その一 8. J.H.ウェスターホフ、『子どもの信仰と教会』 その二 9. ジャック・L.シーモア編、『キリスト教教育の現代的展開』、その一 10. ジャック・L.シーモア編、『キリスト教教育の現代的展開』、その二 11. ナラティブ・ペダゴジーとは その一 12. ナラティブ・ペダゴジーとは その二 13. ナラティブ・ペダゴジーとは その三 14. J.W.ファウラーの信仰発達論との対論 15. 教会教育学の展望</p>	
<p><準備学習等の指示> 履修者に1~2度発表していただくが、発表しない学生も当該箇所を事前に読んで、当日の議論に積極的に加わっていただく。</p>	
<p><テキスト> 朴憲郁、『教会教育の出現とその特性』、『キリスト教教育論集』第20号、2012年3月、日本キリスト教教育学会、1~15頁、(プリントまた抜き刷りで用意)</p>	
<p><参考書> ・J.D.スマート、『教会の教育的使命』、(原著1954年)1958年、日本基督教団出版部 ・L.M.ラッセル、『キリスト教教育の革新』、(原著1967年)1971年、新教出版社 ・J.H.ウェスターホフ、『子どもの信仰と教会』、(原著1976年)1981年/1998年、新教出版社 ・ジャック・L.シーモア編、『キリスト教教育の現代的展開』、(原著1982年)1987年、新教出版社</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 2/3以上の出席を評価の前提とする。発表と討論での発言などの参加度、レポート(5000~6000字、その際参考文献2冊以上列挙、利用のこと)提出などで評価する。</p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件>2011年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者は、博士論文指導演習組織神学bと通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 学生各自の関心に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。</p>	
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、博士論文の部分的作成に寄与する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件>2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者は、博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。
<p><授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。</p>	
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、博士論文の部分的作成に寄与する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成を継続する。</p>	
<p><履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>	
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	